
共同研究の概要

島村恭則

本報告書は、2001年度から2003年度までの3年間、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）において実施された個別共同研究「民俗学における現代文化研究」の研究成果をとりまとめたものである。

私事で恐縮だが、筆者は、民俗学を志した学部生、および大学院生だった頃、歴博から次々と刊行される『国立歴史民俗博物館研究報告』の民俗学関係特集号を購入し、学界の最先端の議論が展開される論文群を、文字どおり舐めるように読み、新しい研究成果を吸収していった。このことは、編者に限ったことではなく、おそらく当時の多くの大学院生、若手研究者においても同様の経験が共有されていることであろう。明らかに、『国立歴史民俗博物館研究報告』は、館外の学界や教育界に対して、大きな存在意義を持っていた。そして、これは今日においても同様であろう。

1998年4月、筆者を含む3名の助手が歴博民俗研究部に採用された。いずれも『国立歴史民俗博物館研究報告』で育ったかつての大学院生たちであったが、こんどは、一読者ではなく、国立歴史民俗博物館の教員として共同研究に参画し、あるいはこれを企画・運営する立場に立つことになったのである。着任後、筆者らは、当時、すでに実施されていたいくつもの魅力的な共同研究に途中参加し、そこで多くを学びながら自らの研究を深化させていった。

そして1999年秋。国立歴史民俗博物館では、次年度からの共同研究の企画募集が行なわれたが、これに対して、同僚の山田慎也氏と編者とが語り合い、新たな民俗学の方法論について議論するような共同研究を、自分たちで立ち上げようということになった。以後、数日間、夜を徹して、山田氏と編者は共同研究の構想を練り上げ、また共同研究に参加していただく館外メンバーをどなたにお願いするかなどについて検討を重ねた。そこで交わされた議論には、かつて編者らが読み込んだあの『国立歴史民俗博物館研究報告』に続く、あるいはそれを乗り越えるような特集号を編めるだけの共同研究を企画しようという気概が満ちあふれていたように記憶している。

そのような準備を経て企画書を作成し、関係機関での審査をクリアしたのち、2000年4月に立ち上がったのが、本共同研究である。

以下、研究の目的、共同研究員、各年度の研究実施状況、研究成果の概要、の順で、3か年にわたる共同研究の概要を記録しておきたい。

1 研究の目的

民俗学においては1970年代から「都市民俗学」が提唱され、同時代の社会・文化を対象とする研究がなされるようになった。しかし、そこでは、既存の民俗学からの方法論的なパラダイムシフトを経ずに個別の事例研究が進められたため、現代社会のダイナミズムをうまく捉えることができないという結果を生むこととなってしまった。すなわち、「都市民俗学」の挫折とでもいうべき事態に至ってしまったのである。

これに対して、1990年代後半から、未だ体系化には至っていないものの、「現代民俗」研究、「世相解説」といった名称のもと、より広い枠組みで現代の文化現象に取り組む動きが見られるようになってきた。また一方で、欧米で展開したカルチュラル・スタディーズ（文化研究）が日本の人文社会科学にも影響を与え、文化の政治性やメディアのあり方を射程に入れた新たな研究の成果が生み出されつつある。

このような研究動向をふまえ、本研究では「都市民俗学」を脱却した新たな「現代民俗」研究について、具体的事例研究を通して体系化を試みるものである。そこでは、近年の隣接領域の研究をふまえ、ジェンダー、マイノリティ、メディア、消費といった従来の民俗学では十分展開されなかった問題について具体的に分析する。また、そうした実証研究の過程で、カルチュラル・スタディーズなど新来の学問領域との方法論的照合を行ないながら、民俗学の理論的独自性を見いだす作業を進展させる。その上で、とかく理論追従になりがちなカルチュラル・スタディーズ周辺の研究姿勢を相対化し、実証的な文化研究の構築をはかるものである。

2 共同研究員（※は研究代表者）

- 岩田 重 則 東京学芸大学教育学部
岩竹美加子 ヘルシンキ大学レンヴォール・インスティテュート
岩 本 通 弥 東京大学大学院総合文化研究科
川 橋 範 子 名古屋工業大学工学部
北 田 暁 大 東京大学社会情報研究所
※島 村 恭 則 秋田大学教育文化学部
高 岡 弘 幸 高知女子大学文化学部
中筋由紀子 愛知教育大学教育学部
中 西 裕 二 福岡大学人文学部
政 岡 伸 洋 四国学院大学社会学部（現・東北学院大学文学部）
安井真奈美 天理大学文学部
青 木 隆 浩 本館民俗研究部
内 田 順 子 本館民俗研究部
篠 原 徹 本館民俗研究部
山 田 慎 也 本館民俗研究部
吉 村 郊 子 本館歴史研究部

[本館民俗研究部客員教員として参加]

岡田浩樹 神戸大学国際文化学部

(所属は、いずれも2003年度末当時のもの)

3 各年度の研究実施状況

[2001(平成13)年度]

第1回研究会 2001年6月23日, 24日 国立歴史民俗博物館

島村 恭 則「歴史民俗学は成立するか—歴史学と民俗学の協業をめぐる理解と誤解—」

中西 祐 二「人類学的日本研究と民俗学的日本研究について考える」

岡田 浩 樹「民俗と〈民俗〉そして文化の狭間で—揺れ動く「民俗」「文化」の位相と内在化, 表象, 実践のダイナミズム—」

第2回研究会 2001年12月15日 国立歴史民俗博物館

政岡 伸 洋 「部落問題との関わりから民俗学を考える」

篠原 徹 「国家と民俗—中国・海南島の開発・環境・文化—」

西川 長 夫 (ゲスト・スピーカー)「『私文化』をめぐる諸問題—アイデンティティ論を中心に—」

第3回研究会 2002年2月9日, 10日 大阪府和泉市立人権文化センター

岩竹美加子「戦略としての民俗学・人類学」

現地調査: 和泉市人権資料館における民俗表象のあり方について。

[2002(平成14)年度]

第1回研究会 2002年12月15日 国立歴史民俗博物館

小国 喜 弘 (ゲスト・スピーカー)「民俗学運動と学校教育—民俗の発見とその国民化—」

青木 隆 浩「近代・地理学・民俗学」

第2回研究会 2003年3月30日, 31日 福岡大学

白川 琢 磨 (ゲスト・スピーカー)「民俗宗教の政治学—金毘羅山の事例から—」

山田 慎 也「イギリスにおける死の研究と葬儀の現状」

現地調査: 北部九州における「近代の民俗」に関する現地調査 (篠栗新四国霊場, 飯塚市嘉穂劇場, 田川市石炭資料館)。

[2003年(平成15)年度]

第1回研究会 2003年11月2日, 3日 高知県立高知女子大学

内田 順 子「記録映像における『本当らしさ』の演出と音響編集技術」

高岡 弘 幸「幽霊の変容—民俗学的『近・現代』研究に向けての試論」

現地調査: 高知における「近代の民俗」に関する現地調査 (高知県立歴史民俗資料館, 高岡弘幸

氏作成の怪異・怪談マップに関する伝承地)。

第2回研究会 2004年1月24日, 25日 秋田大学

島村恭則『『生きる方法』の民俗学へ—在日朝鮮半島系住民の民俗誌から—』

島村恭則「菅江真澄資料の現代民俗学への活用について」

今年度の共同研究についてのとりまとめ

現地調査：民俗の「文化資源化」の実態について（秋田県立博物館菅江真澄研究センター，男鹿市真山伝承館）。

第3回研究会 2004年2月29日 国立歴史民俗博物館

中筋由紀子「インタビューという技法をめぐって：現代社会における語りの変容と調査について」

川橋範子「反転する表象としての日本あるいは沖縄女性」

島村恭則「最終総括」

4 研究成果の概要

2001年度は、「歴史」「ホーム・アンソロポロジー」「マイノリティ」「国民国家と民俗」「多文化主義」「ポストコロニアリズム」などについて、現時点における民俗学およびその周辺での議論の進捗状況・問題点について洗い出す作業を共同で行なった。いずれの議論においても、民俗学的方法的独自性がどのあたりにあるのかについての独創的な考察が展開された。

そこでは、たとえば、民俗学は、「実体」としての「民俗」「文化」を静態的に研究するのではなく、「社会過程」の分析を民俗学の視角から行なうところに独自性を主張すべきだといった見解などが提示された。この視点などは、民俗学全体への重要な理論的問題提起となっている。

また、こうした理論的検討を、フィールドワークの中で共同で検証する試みも行なっており（和泉市にて実施）、理論をめぐる議論が机上の空論に陥ることをかなりの程度排除することができたと考えている。

なお、第2回研究会にゲスト・スピーカーとしてお迎えした西川長夫氏（立命館大学国際関係学部教授。フランス文学・比較文化論）は、国民国家論研究の第一人者である。これまで歴史学や社会学、人類学などの学界においては、西川氏を招いての議論は何度も行なわれてきているが、民俗学においては、西川氏との議論が展開されることは皆無であった。今回、はじめて、西川氏と民俗学研究者との「民俗」をめぐる深い議論が実現したのであり、学界動向の上で画期的な出来事であったといえる。

つづいて、2002年度には、現在、民俗学においてその実証的検討が急務とされている「民俗の発見と国民化」およびその過程における学史的オルタナティブについての分析が、ゲストスピーカーとしてお招きした小国喜弘氏（東京都立大学人文学部助教授。教育学）のご協力を得ながら大きく進展した。

また、同じく、今日の民俗学において本格的取り組みが要請されている「近代」と民俗との関わりについても、この領域を専門とする新規参加メンバーの精力的な研究に刺激され、また、第2回

研究会での当該テーマによる現地調査（北部九州の炭鉱地帯）の実施によって、大いに分析が深まった。

さらに、民俗宗教のはらむ政治性についての議論も、ゲストスピーカーとしてお招きした白川琢磨氏（福岡大学人文学部教授。文化人類学、宗教学）のご報告（金毘羅信仰をめぐる具体的分析等）をもとに、深化させることができた。

最終年度の2003年度には、「民俗学」と「近代」との関わりについて、とりわけ「民俗学的近代」という概念の有効性についての検証を行なった。また、カルチュラルスタディーズと民俗学との関わりについても、具体的な民俗誌叙述の提示をもとに批判的検討を実施した。さらに、民俗の「文化資源化」「観光化」をめぐる現状分析や、映像民俗誌と音響の関わりについての理論的検討、フェミニズム人類学から見た民俗学、社会学から見た民俗学的「現代文化」研究の問題点と可能性、などの議論を展開した。

以上の一連の研究成果が取り上げた課題群は、いずれも、従来の民俗学界ではほとんど扱われることのなかった内容のものである。この3年間に、それらの諸課題を真正面から取り上げて検討した成果は、現代民俗学の理論的水準としては最先端の一角に位置するものということができるであろう。

以下、本報告書では、本共同研究の課題に関わる共同研究メンバーによる論文、およびゲストスピーカーによる講演記録を掲載する。なお、ゲストスピーカーのうち、白川琢磨氏には、ご講演とは別に、新たに書き下ろされた論文をご寄稿いただくことができたため、本報告書にはそちらのほうを掲載している。

〔謝辞〕

末尾になりましたが、本共同研究にゲストスピーカーとしてご参加いただいた西川長夫、小国喜弘、白川琢磨の各氏、共同研究員として共同研究に参加することをご快諾いただき、また報告書へご寄稿くださった館外研究者の皆様、現地調査においてお世話になった現地関係者の皆様、共同研究の遂行にお力添えいただいた国立歴史民俗博物館の教職員の皆様、そして館内事務担当者として複雑かつ膨大な量の事務作業を処理してくださった青木隆浩氏に、心よりお礼申し上げます。

（秋田大学教育文化学部、国立歴史民俗博物館共同研究員）